

3・4・5 大人の教室 2017年テーマ

『満蒙開拓団』とは何だったか

<講座進行予定>

- ① 4/22 生き証人「山川達二氏」の半生(前編)と『満蒙開拓団』のさわり 3
- ② 5/13 『満蒙開拓団』の時代背景の勉強 12
- ③ 7/22 NHK スペシャル 満蒙開拓団はこうして送られた ~眠っていた関東軍将校の資料~ 13
- ④ 9/23 NHK 戦争証言アーカイブス 満蒙開拓青少年義勇軍 ~少年と教師 それぞれの戦争~ 14
- ⑤ 11/25 「蒼い記憶－満蒙開拓と小年たち」製作:満蒙開拓・映画製作委員会 15
- ⑥ 1/27 生き証人「山川達二氏(89)」の半生(後編)と未来へのメッセージ 16
- ⑦ 3/24 予備日 テーマのやり残しをおさえる。 30

受講者指名

主催：山元町 3・4・5 丁目町内会

回								
覧								



H29.3.25

山元町3・4・5丁目町内会 会長 斉藤正則 遠藤文化部長

「3・4・5 大人の教室」 開講のご案内 2017年テーマ「『満蒙開拓団』とは何だったか」

1931年(昭和6年)の満州事変以降、1945年(昭和20年)の太平洋戦争敗戦までの期間に、中国大陸の旧満州、内蒙古、華北に入植した日本人移民がいた。
日本の大陸政策の要として、また昭和恐慌下の農村更生策の一つとして遂行され、14年間で27万人が移住した。14～16才の農村の少年達も満蒙開拓青少年義勇軍として大陸に送られた。
終戦と同時にソ連に攻め込まれ撤退・逃避行を余儀なくされた。引き揚げの途中で多くの死者、行方不明者、収容所での感染症による病死者を出した。日本に帰国できたのは11万人あまり。
新潟から移住しわずか3カ月で終戦を迎え1年後に引き揚げた山川達二氏(保健・厚生副部長)の証言を軸に、プロジェクターを使い資料画像や資料映像を投影しながら、その全容を学ぶ。



記

目的: 生き証人「山川達二氏(89)」のお話や、様々な資料を基に講釈をしていただきながら、その全容をゆっくりと紐解き、今後の人生訓を得る。

語り部: **山川達二(保健厚生副部長)**

企画運営: 345丁目町内会役員
司会・進行: 佐野部長、会場: 平野部長(音響)・遠藤部長(照明)、
記録: 森地域交流推進員、機材操作: 中野副会長

受講対象者: ご興味のある方
(中学生以上・345町内会以外の方もウエルカム・移民経験者は大歓迎)

開校日時: 4/22、5/13、7/22、9/23、11/25、1/27、3/24
いずれも土曜日 19～20:30 来れない日は欠席で可

開校場所: **山元小学校コミュニティハウス 研修室1**

受講料: **無料** 受講予定人数: 20名程度

申込: **不要** 自由に来て着席してください。

各自持参物: **ノート、筆記具、飲み物、お菓子など**

一方的な講義ではなく、参加者皆さんで自由闊達に発言し、共に知見を広げる授業にしたいと思います。あなたのご参加をお待ちしております。

① 4/22 生き証人「山川達二氏」の半生(前編)と『満蒙開拓団』のさわり

私の生い立ちと人生 山川達二(89) 2017年記

昭和3年(1928)1月2日誕生

住所 新潟県南蒲原郡大崎村大字三ツ柳 805

父 山川貴一 母 キソ の4男2女の2男としてこの世に出来ました。(山川家家系図)

昭和8年4月6日 尋常高等小学校入学

昭和17年3月30日 高等科2年卒業

// 4月1日 茨城県日立市日立製作所に入社
(各県に割り当て) 3年間勤務

昭和20年5月30日 家族から移住話が起こり、国

家の食糧補給の任という理由を付けて退職。父と共に新潟県中越地区満蒙開拓団(47人)として新潟港より5千トンの白山丸にて満州の地に出港。

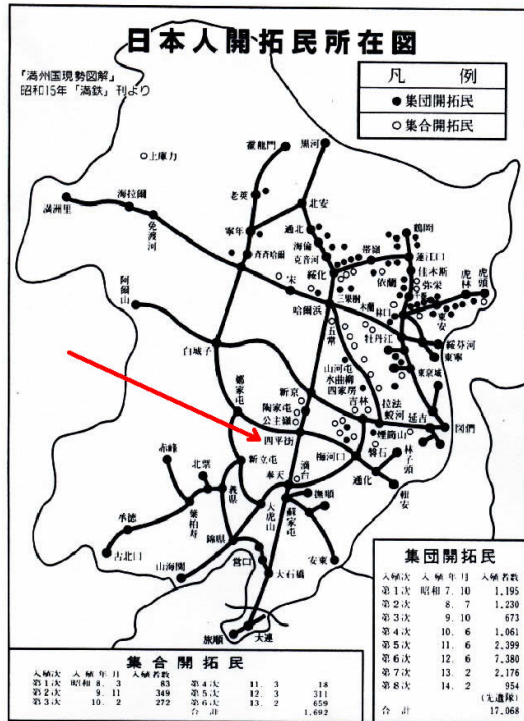


6月1日 北朝鮮の元山港に上陸。

6月でも気温は零下10度位の寒さで驚く。

迎えに来た陸軍のトラック2台に

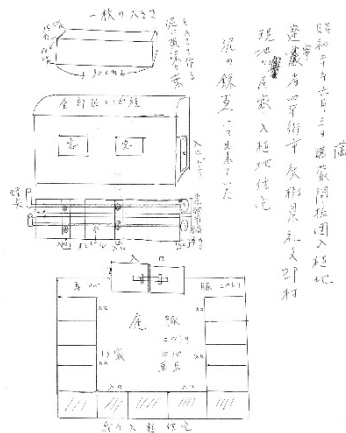
満鉄の駅まで送っていただき、2泊3日にて現地遼寧省四平街市の駅に到着。



街中は道路巾が百mぐらいの広い道路。車も走っていない直線。信号もないので目を輝かせました。県庁で迎えられて、入植地の説明を聞き、県の指定旅館で一泊。次の日は現地に向かってトラックで移動。第1の地点は梨樹県という所に到着。市からの開拓団に対し

ての細分にわたる具体的な解説があり、指定の旅館に一泊。

次の日は又トラック2台に分乗して入植地を目指して移動。夕方5時頃現地に到着しました。



住む家は満人を立ち退かした土の煉瓦でできた泥の家。住所は「遼寧省四平街市梨樹県礼文村」。現地人(満人=中国人)と共同住宅に入植しました(居住見取り図)。

県及び市より支給された食料および農具は、日本米百 kg、野菜類と調味料類などでご飯

などは現地人の鍋で高粱(こうりゃん)を炊く鍋に炊いていました。

農作業用に牛 8 頭、馬(満馬)5 頭と作業用鋤(すき)などが支給されました。

満蒙開拓団「礼文屯村」の 1 日の生活はこうでした。

朝 5 時頃に、囲いの中の口バとニワトリの大きな鳴き声で目覚め、女性らは大鍋にお米を入れて 47 人分の 3 食分をまとめて炊きました。

我々男性は囲いの外に出て日の丸の旗を大きな柱につけて、日本の方向に向いて整列し、皇居のほうに向かって揚拝をしました。

全員で君が代を歌い、天皇陛下万歳をして、朝食を戴きました。10 時前後には男女とも一緒に農作業をはじめ、午後 6 時ごろに 1 日の仕事を終了します。

住宅の周りは畑で片道約千メートルは有る広大な農地でした。ジャガイモは 1 町歩(約 3000 坪)の範囲に植えていました。

主な植生はコーンの種で、畑の面積は山元町第 6 地区ぐらいの農地があり、約 1 カ月かけてコーンを植え終わりました。

水は井戸水で、現地人と共同で生活用水としていました。生水は飲めず一度お湯にしてから飲みました。

電灯はなく油を明かりとして使用し、夜は日本の昔のカンテラのようなもので暮らしていました。

現地の住宅にはトイレがなく、我々開拓団で穴を掘り小屋を建ててトイレにしました。多人数で使用したので 10 日ぐらいで満杯になり、

汲み取りをして畑の肥料としていました。

ようやくジャガイモができたころに日本は敗戦したと現地の人々が騒ぎ出しました。

昭和 20 年 8 月 10 日頃 開拓団の男性で 20~40 代の皆さんに現地入隊の赤紙が届き、対象の 5 人が現地に出発しました。元気のある方が抜けたところで、戦争に負けました。※ほどなく撤退のため任務が無くなり戻ってこられ再度合流。

満人たちが押し寄せてきて、我々は住宅から追い出され、女・子供・高齢者と我々 10 代が一団となって追われるようにして逃げました。その日は悪いことに雨季。土の畑の中の道路は泥まみれで、3 日間どろどろになって歩き、やっと県庁までたどり着きました。

ところが、日本人及び軍人などの皆さんはすでに退所していませんでした。家の中も現地の満人が家財道具などを持ち去り、住むところはありませんでした。

それでも、3 日 3 晩苦勞して移動してきたので、何も無いところに入り、まずは、体力及び気分が休めました。

一晩休んで次の日はまた 47 人で四平街市まで歩き出し 2 日間ようやく戻ることができました。

市にたどり着いたところで、なんとか住む家が一軒ありました。着

の身着のままでの生活が始まりました。

まず、食料の調達ですが、お金は日本の現金しかもっていないので困りました。

私どもの団長さんが県庁に行かれて、日本人の方がおられて、中国の紙幣を頂いてきて、食料を買いました。

鍋などはとりあえず古いものがあつたのでそれを使い、薪などは建物の板とか不用品を燃料にしてご飯だけは食べられました。

四平街市で一夜明けて次の日 8 月 21 日頃、ロシアの兵隊が 3 人土足で入ってきました。

マンドリン自動小銃を持ってなにか分からないことを言っていました。

我々が持っていたリュックサックや下げ袋を出すよう言っていました。皆さん、持参品を広げて並べました。そうすると時計とか万年筆、指輪など金目の品物を取って立ち去っていきました。ロシア兵はこのような品物を持つことがなかったので、難民がいるところに入り取り上げていったのです。

次の日、四平街市の大通りに買い物に行って見たものは 10 台ぐらいの大型戦車でした。1 台 60 トンだと現地の満人たちが話しをしてくれました。

道路では一輪車で木の平台にアワモチを乗せて売っていました。一

切れ切り取り天秤計で重さを計って現地の軍ピョウ(軍用手票・ぐんようしゅひょう)で 50 銭とのことで皆さんそれぞれ買ってきて夕食などで食べました。

9 月になると四平街駅の倉庫にロシア行きの高梁が倉庫に満杯に積み上げてありました。それは、1 袋 100kg 入りの重さでした。

我々は運搬作業にかり出され、この高梁を貨車に積み込むことでした。1 台の貨車に積み込む数は百袋ぐらい。貨車の入り口と地面に橋板を渡して百 kg をかついで積み込むのです。あまりの重さで橋板を登れませんでした。夕方までには何とか登れるようになりました。その貨車は 1 列車 60 台も連結されているので積み終わるまでに 3 日ぐらいかかりました。

そんな折にシベリアに連れていかれる日本の兵隊さんが連日のように貨車に詰め込まれて行くのを見送りました。秋が近いのでシベリアは厳寒の地なのに、皆さん着ていた軍服は夏用でした。靴も夏用のものを履いていました。トイレのない貨物車に入れられているので、列車が駅に着くと止まり、その度に線路に降りて排尿している何百人の兵隊さんを見ました。我々は余りにも苦しい皆さんの姿に胸が痛みました。他事ではありますが、ご無事になされる様、心配して拝んで見送りました。

そんな出来事が終わったところに大事件が起こりました。中国政府軍と共産八路軍の戦争が始まったのです。

10月頃、蒋介石総統と毛沢東の争いで、国軍は米国の後ろ盾で、八路軍(毛沢東)はロシアの後ろ盾で、戦争になりました。我々は又使役に引き出され、広大な高粱畑に戦争用の塹壕掘で毎日畑に穴掘りに行きました。その穴で兵隊さんが戦って、押したり押されたりしているうちに昭和21年7月、政府軍がようやく勝利しました。

ところが、その戦いで戦死した穴の中のいた何百人もの兵隊さんを埋葬するため、死体を掘り起こして棺桶に入れるという作業が必要になり、それにかかり出されました。作業中に、兵隊さんが身に着けていた手榴弾が暴発したり、腐乱していたりと、筆舌に尽くしがたい過酷な任務でした。

それが終わった頃、鉄道が保線されて汽車が走れるようになったのと蒋介石軍と米国の計らいで、毎日、日本に帰るための汽車が運行されました。

我々も7月20日頃に順番が回ってきて、貨物列車に入れられて一路帰行の港大連港に到着しました。が、それから又1問題がありました。

我々が乗るのは米軍の上陸用リバティ船ですが、弾薬とか戦争の用具を乗せて来たものですから、我々が乗船するために戦争用の弾薬

などを全部陸揚げしなくてはなりませんでした。

毎日毎日船に行き弾薬とか大砲などを倉庫に陸揚げして 5 日間ぐら
いでようやく終わりました。やれやれと 1 日休んで 7 月 29 日にリ
バティ 29 号に乗船でき、ようやく帰国の途に就くことができました。
船は鉄板で船倉の中は日中は夏の太陽の暑さでいられず、3 百人ぐら
いの皆さんが甲板に出て海風で真夏の太陽の熱をしのいでいました。
4 日ぐらいで舞鶴港に入港したとたん船が故障して運航できずに又
1 日港の入り口で一晩を過ごして次の日船が迎えに来てようやく上
陸できました。

皆で陸に上がって万歳しました。日本に上陸したと泣きました。

3 百人の引き揚げ者の皆さんを待っていたのは消毒でした。全員が並
んで、頭から背中まで粉の DDT をかけられました。それからお風呂
に入れられました。それは薬用のお風呂でした。次に普通のお風呂
に入り、入国手続きして、一人帰郷の汽車代金 8 百円を支給されま
した。1 泊はお寺のお堂に泊まり、日本海側を列車で移動し、昭和
21 年 8 月 2 日に上越線の東三条駅に到着しました。

その時に出迎えた皆さんは、昨年送り出しをして下さった農協の会
長さんや村長さん、村の区長さんなどの皆さんでした。駅前の農協
の事務所で、開拓団として送り出した皆様方が、皆が全員無事に帰
国できたことをよろこび、苦勞に対する謝罪とねぎらいをしてくだ

さいました。

8月3日、生家に父親と2人で戻りました。(後編に続く)

●Google 検索 「満蒙開拓」画像●

https://www.google.co.jp/search?q=%E6%BA%80%E8%92%99%E9%96%8B%E6%8B%93&lr=lang_ja&hl=ja&tbs=lr:lang_1ja&source=lnms&tbm=isch&sa=X&ved=0ahUKEwiavPfy_oJPSAhXLgrwKHfITB3kQ_AUICSgC&biw=1842&bih=982

●YOUTUBE●

満蒙開拓団の暮らし YOUTUBE 15分

<https://www.youtube.com/watch?v=ZdffgsE3PAQ>

② 5/13 『満蒙開拓団』の時代背景の勉強

●ウィキペディア●

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%BA%80%E8%92%99%E9%96%8B%E6%8B%93%E7%A7%BB%E6%B0%91>

満蒙開拓移民(まんもうかいたくいみん)は、

1931年(昭和6年)の満州事変以降、1945年(昭和20年)の太平洋戦争敗戦までの期間に大日本帝国政府の国策によって推進された、中国大陸の旧満州、内蒙古、華北に入植した日本人移民の総称である。

満蒙開拓団(まんもうかいたくだん)とも言われる。

1932年(昭和7年)から大陸政策の要として、また昭和恐慌下の農村更生策の一つとして遂行され、14年間で27万人が移住した。

都道府県別 満蒙開拓移民人数 (ある記録)

	開拓団	青少年義勇隊	合計
長野	31,264	6,555	37,859
山形	13,252	3,825	17,177
熊本	9,979	2,701	12,680
福島	9,578	3,037	12,615
新潟	9,381	3,280	12,661
宮城	10,180	2,238	12,419
岐阜	9,494	2,566	12,060
広島	6,345	4,827	11,172
東京	9,168	1,953	11,161
高知	9,151	1,331	10,482
秋田	7,814	1,638	9,452
群馬	6,147	3,058	9,206
群馬	6,927	1,313	8,240
青森	6,510	1,853	8,363
香川	5,908	2,378	7,886
石川	4,463	2,838	7,271
山口	3,763	2,745	6,508
岩手	4,443	1,992	6,436
岡山	2,898	2,888	5,786
鹿児島	3,432	2,268	5,700
奈良	3,940	1,298	5,240
富山	3,759	1,425	5,182
福井	3,057	2,078	5,136
山梨	3,168	1,938	5,106
愛媛	2,200	2,323	4,523
兵庫	2,170	2,231	4,401
埼玉	2,900	1,983	4,883
佐賀	2,800	1,500	4,300
栃木	1,428	2,802	4,231
大塚	2,030	2,123	4,153
三重	2,751	1,208	3,959
鳥取	1,339	2,287	3,626
茨城	1,951	2,022	3,573
宮崎	1,789	1,813	3,382
茨城	1,415	1,953	3,378
徳島	1,243	2,082	3,325
和歌山	1,272	1,877	3,149
北海道	2,002	1,127	3,129
福岡	1,889	1,442	3,114
鳥取	1,527	1,525	3,052
沖縄	2,350	644	2,994
大分	739	1,806	2,571
愛知	634	1,724	2,358
長崎	747	1,403	2,150
千葉	1,037	1,111	2,148
神奈川県	1,013	975	1,988
滋賀	93	1,354	1,447
合計	220,235	101,627	321,862

<目次>

- 1 概要
 - 2 背景
 - 2.1 費用案
 - 3 開拓移民団
 - 4 入植の実態
 - 5 移住後の問題
 - 6 開拓団の引き揚げ
 - 7 文学者たち
 - 8 関連項目
 - 9 脚注
 - 10 参考文献
 - 11 外部リンク
- つづきはサイトで...

③ 7/22 NHK スペシャル 満蒙開拓団はこうして送られた ～眠っていた関東軍将校の資料～

NHK スペシャル 満蒙開拓団はこうして送られた～眠っていた関東軍将校の資料～ 50分 プロジェクター上映

<https://www.youtube.com/watch?v=ejMaOdvvZaw>

東宮鐵男(とうみやかねお)

●ウィキペディア●

東宮 鉄男(とうみや かねお、正字は東宮鐵男、1892年(明治24年)8月17日 - 1937年(昭和12年)11月14日)は、日本の陸軍軍人。「満蒙開拓移民の父」とよばれる。満州を中心に活動した。張作霖爆殺事件の実行者であり、満州への移民を推進した中心人物として知られる。日中戦争初期の1937年、歩兵第102連隊大隊長として中国で戦死した。死後特進し陸軍大佐となる。

NHKスペシャルによる永田稔と満州移住(文章によるまとめ)

<http://www.gendaiza.org/aliansa/lib/21-02.html>

④ 9/23 NHK 戦争証言アーカイブス 満蒙開拓青少年 義勇軍 ～少年と教師 それぞれの戦争～

満蒙開拓青少年義勇軍 ～少年と教師 それぞれの戦争～ | 番組 |

NHK 戦争証言アーカイブス 90分 プロジェクター上映

http://www2.nhk.or.jp/shogenarchives/bangumi/movie.cgi?das_id=D0001230003_00000

戦地 満州(興安、嫩江) 日本(長野) 放送日 2010年8月11日

- 1 教師に送り出された義勇軍の悲劇
- 2 長野県・第七次斉藤中隊
- 3 教師による勧誘～渡満
- 4 嫩江訓練所の訓練生活
- 5 義勇軍創設の真意 ～関東軍の予備軍～
- 6 厳しい訓練所の現実 体罰・赤痢
- 7 満州を覆う不穏な空気
- 8 8月9日、ソ連軍侵攻の日
- 9 逃避行、現地住民との交戦
- 10 中国人の処刑、ソ連軍との交戦
- 11 送り出したのは教師だった

12 長野県・送出1位の背景 ほか

⑤ 11/25 「蒼い記憶－満蒙開拓と小年たち」製作:満蒙

開拓・映画製作委員会

「蒼い記憶－満蒙開拓と小年たち」製作:満蒙開拓・映画製作委員会

90分 プロジェクター上映

<https://www.youtube.com/watch?v=tCeRQm0FljM&t=297s>

「満蒙開拓青少年義勇軍」とは？「中国残留孤児」がなぜ生まれたのか？戦後50年、歴史の真実を伝えるアニメ映画

⑥ 1/27 生き証人「山川達二氏(89)」の半生(後編)と未来へのメッセージ

8月3日、生家に父親と2人で戻りました。

ところが、母親は私達が不在中、2人の子供を世話しながら、農地畑の農作業を1人で行った無理がたたって、末期の胃がんに苦しんでいました。当時は、病院はありましたが、がんなどの薬剤はなく、痛み止めを点滴でしかできない現実でした。8月21日46歳の若さで死亡しました。今では考えられないことです。

それから2年ぐらい兄と父親の3人で米作りの農作業をしました。

その後、兄に嫁さんが来て下さり、私は不要な状態になりました。

何か身に付けられることはないかと考え、当時まだ自動車が余りなくて、将来、免許証が役に立つだろうと思い、新潟市内に1校だけあった自動車学校に入学しました。1年間勉強して試験を受けるのですが、その頃の受験は法規を書くことになっていて、何が問題として出るのか分からず、大体の法規を暗記していないと答えがかけませんでした。そのため、3、4回受験しても合格できませんでした。自動車学校をあきらめ、生家の近くの「新陸丸運」という会社に入り、運転見習いで1年頑張り再度受験しました。大体の法規を暗記していたのでやっと合格しました。

実技のほうが又大変でした。河原で受験車を運転するコースがあるのですが、その受験車は、戦前のシボレーとフォードの2車で、セルモーターがなく、エンジンは車の前にてクランク棒で回してエンジンを始動させました。1回エンストすると又やり直しという大変な古い車で、運転席に座ってもようやく前方が見えるような車でした。4回目の受験でようやく免許証が頂けました。

その後、農協のトラックの運転者として農協に勤めましたが、冬になると雪のため仕事がなくなり、農協を退職しました。

昭和25年1月31日、当時川崎に父の下の叔父さんがおり、それを頼りに行き、半年ぐらい、三菱重工多摩川工場に臨時工員として勤めましたが間もなく退社しました。

横浜の高島町に知人がいて、この人を頼りに行きました。横浜市内は全然分かりませんでした。この人の仕事の手伝いを半年しました。その後、横浜市内が分かる仕事がないかと知人に相談したところ、中華街にお煎餅会社がありその会社に住み込みで入社することができました。毎日自転車で市内のお菓子店に配達することになりました。ところが、その自転車が終戦後の棒タイヤのためペダルを踏んでも重くて汗水を垂らして走るのですが進みません。その上荷台に煎餅の缶を6缶も積んでいるので半日で2、3件しか配達ができませんでした。社長さんに呼ばれていくとすぐに退社せよと申さ

れて退社。

それから、保土ヶ谷区の天王町に行き、友達ができて、3人で1間の部屋を借りて住みました。当時平沼に古河電線の工場があり、その下請け会社に入社しました。オート3輪車が3台あって、工場のごみ積みの仕事を3人で毎日勤めました。

2年ぐらいして退社し、次は、ミツウロコ練炭会社の運転手として入り神奈川県炭屋さんに炭を配達していました。

当時毎日天王町で朝7時から食事ができる食堂がありそこで毎日食事をして弁当も作っていただきました。

その食堂を手伝っていた娘さんが一人いまして、2年ぐらいしたときに私に食堂のご主人様が娘を嫁にしませんかという話がありました。半年ぐらい考えて結婚を決めました。

私の生き路を開いてくれ、人生の道しるべになってくれた人が我一生の宝である妻です。

その生誕より歩んだ人生航路を振り返って記してみたいと常日頃感じていました。

ここで、一生一度の長い道程を思い返してつづってみたいと思います。

妻は、昭和5年5月11日、2男4女の6人兄弟姉妹の2女として

世の中に生まれてきました。

生誕地は山梨県大月市笹子村大字黒野田です。

現在は笹子トンネルの入口前、東京寄りの坂下です。

中央線の笹子駅近くの笹子尋常高等小学校に通い、昭和 18 年 3 月 31 日卒業しました。

戦時中なので、すぐに学校から指定された埼玉県川越市の機織工場に入社することになりました。

昭和 20 年 8 月 15 日、太平洋戦争終戦と同時に退社し、生まれた笹子村黒野田の実家に戻り、お兄さんのお手伝いをしていました。

当時日本の燃料は薪とか炭などでした。その木炭をお兄さんが山に行き炭窯で作っていました。毎日それのお手伝いを 5 年ほどしていました。

昭和 25 年に、親戚の伯父さんが横浜市保土ヶ谷区天王町で小春食堂というお店をしていました。

私たちは区役所より当時支給されていたお米券を持って食堂に行き、1 食につき 1 枚を渡して食事をしていました。

お店はそんな我々のような人が大勢いて食堂は毎日大忙しでした。

そこで、食堂の伯父さんが、親戚である笹子の富田家の娘さん 3 人に目を付けました。長女は嫁がれていましたので、当時 1 番上だった私の妻となった房子さんが伯父さんに食堂のお手伝いをしてくだ

さいと申し込まれて、横浜の保土ヶ谷区天王町に来浜されました。

伯父さんは、私たちが毎日朝と夜食事に行き、若い女性の方がお手伝いに来てくれたので大助かりと申されました。

我々はその娘さんが目的で、より一層若い我々のような人達が食事に来るようになって、皆さん目的が同じで、娘さんが何かと世話をしてくれることがあり近寄っていました。

当時私は練炭会社の配達でしたので毎日お腹がすいて大盛りご飯を食べていました。

そんな折に食堂のご主人様より娘さんをお嫁さんにしないかとお話をいただきました。私は何も考えていなかったのでお話を聞き流していました。半年ぐらいしてまた話がありこの話を会社でしたら仲人をしてくれる人がいました。

昭和 29 年 10 月に当時の玉天皇様神社で内々の神前結婚式をし、披露宴を小春食堂でいたしました。新居は近隣の民家で 2 階 1 間を借りて住居としました。

練炭会社の仕事は体力的に無理だと思って退社し、何かできることがないか探している時に、小春食堂に相談してみましたら、うちのような食堂をしてみたらと申されました。何から何まで手助けをしていただき、2 人の門出としてお店を開店することができました。それが踏み出す第一歩でした。

場所は保土ヶ谷駅西口を出て川が流れているところに橋があった川岸で何かと便利な場所で長屋でした。徐々に来客が増え、朝 6 時ぐらいから食事をされて出勤する方々が多くなって、お昼時も来客があり忙しく、店を始めて良かったと思いました。

ところが、お店は長屋が 3 等分されていて、私どものお店は 8 時に閉店するのですが、ほかの 2 店舗は夜のお店だったので 12 時 1 時ごろまでお客様がいてお酒を飲み大きな声で歌いました。家屋はベニア板の戦時中の家ですので防音がないため不眠状態になりました。

さらに、我々のお店の方はお客様が自然と顔見知りになって来て、食事代金を帳面に記すようになり、月末給料日に支払いをするという方々が多くなり現金収入が少なくなっていました。また、給料日になっても支払いをしない方々が何名か出てきました。

そんな折に、小春食堂さんに、妻の妹(秋子)が笹子より出てきました。

何とか 2 年ぐらいした折に、どこから話が来たのか分かりませんが、突然、私たちの店に富田さん親子(妻の親戚)が来店されて、小春食堂に手伝いに来ている妹さんを富田忠雄さんの嫁にほしいと申されるので驚きました。

私どもではその話を決めることができないと申し上げて、笹子の実家と兄弟姉妹の方に以上のお話があることを申し上げました。ところが、皆さん方はその話はお断りしてくださいと申されました。私には何がなんだか訳が分からずでしたが、当の富田忠雄さんが「一生大事に暮らせるように頑張ります。心配のないようにいたします。」と何回も来て、一方的に話を決めて妻の実家にも話をされて、最後はお兄さんが結婚になるように話を進めてくれて決定しました。それから、結婚式はできないからと申し上げられたので、何とかしたいと思っておりましたら、妻の実家のお兄さんの計らいで、南区の唐沢の家で私たちが立会をし、皆さんに唐沢の家に来ていただきまして、形ばかりの式をいたしました。無事に終わってほっとしていた矢先に、妻の実家の一番上の姉さんの嫁ぎ先の大月市の天野さんという方から大変な話がありました。富田家は絶縁状態の家庭であり、私を取り持ったことの反発で、今後親交はできないと申されました。それでもなお、妹たちは頑張って、唐沢の家で子供を相手に駄菓子屋などを開いて生活の足しにしていました。

それから 2 年ぐらいして、私たちのところに富田さんから引っ越し話がありました。親戚の人が山元町 3 丁目 142 番地の阿部さんとい

う方で廃品回収業をされていて、同じく山元町 3 丁目 142 番地に湯浅菓子店があり、この人が住居を貸し出すということでした。その空き家があるので引っ越してこないかと申されました。

我々も店の方は帳面での残高が多く食べ逃げの人が出てきて、お店の営業が苦しくなってきたので思案をしておりましたので、その話に乗りました。

昭和 34 年 6 月 10 日に近くの日本通運の方に引っ越しをお願いして山元町 3 丁目 142 番地に居住するようになりました。

長女も生まれ長男も生まれて 1 才になっていまして、4 人家族で山元町で生活をするようになりました。

私は富田さんの紹介で、間門にありましたアサヒタクシーにドライバーとして勤務し、2 年ぐらいして辞めて、黄金町にありましたフジタクシー会社に入社して 2 年ぐらい勤めました。

その時分に家内の妹さんが洪福寺松原商店街で衣料品店をしていて大変に売れており、自由な時間にお店を出して今のお仕事の何倍もの収入になるという話が来ました。私も妻も用意をして、妹達に手助けをしていただき、商品を仕入れに東京の馬喰横山町に行き、山元町日用品市場の入口に店を出しました。それが昭和 35 年頃でした。

良く皆様方にお買い上げ頂きまして、順風満帆というのか 2 年ぐらいした時に商品が多くなり過ぎ、別の場所に出店するところを当た

っていたところ、今の店のところに、山田さんというお婆さんが一人で住んでいて生活に困っていたとの話で、玄関先を借り店をやることになりました。当時、間口借用で月借家賃を 1 万円支払って借りていました。

それから、お婆さんに私たちが借りている湯浅菓子店の家を買取り、無料で住んでいただき、山田さんちも買い、借地契約を地主と契約しまして昭和 42 年に今現在の住居・店舗兼用の住まいを作り現在に至っています。

当時、住宅兼用店舗にする建築申請書を区役所に提出しました。申告書に鉄筋コンクリートで提出しましたら許可が出ず、1、2 カ月ぐらいして返却されました。その理由は、市に問いただしたら分かったのですが、道路幅を山元町 1 丁目から旭台まで 4 車線幅に拡張する計画があるとのことでした。それ故にコンクリート鉄筋建築はできないとの申立てでした。すでに基礎工事に着手しており、土台は 1m ほど地下を掘ってコンクリートをミキサー車 3 台分入れて鉄筋を入れて出来上がっていました。不許可になり困ってしまいましたが、取り換えもできず、大工さんをお願いして、鉄骨に防火材を張り付けて木造建てとして再度申請して許可が出ました。ようやく工事に取り掛かり 1 年の月日が過ぎて完了しました。

その間に私は無理が積み重なり、山崎医院で診察していただきまし

たらレントゲン写真の数か所で肺結核が見当たりまして、その写真を中保健所に持参して受付で提出し、後日山崎医院に予防のストレプトマイシンを毎月 2 回ほど注射して頂き、1 カ月に 1 回レントゲン写真を保健所に提出して約 3 年で全治しました。

その予防注射をしていただいた山崎医院の先生が、当時、現在の大先生のところにお嫁さんとしてきた先生で、美人だったので、注射されてもなんとなくうれしくて楽しさを感じていました。それ以来、山崎先生及び山崎医院を主治医として現在も通院しています。現在はその先生の長男若先生が生まれた時代より大人になるまでを知っています。

肺結核が全治してからも体調が思わしくないので先生に相談したら、無理をしない程度に走るか歩くかして体調を良くしたほうがいいと言ってくださいました。

それ以来、毎日朝早く起きてまず歩くことから始めました。当時は森林公園はゴルフ場で入ることができなかったので、本牧間門まで歩き、又、不動坂を登って戻ってくるというようなことを 3 年ぐらいいしました。

昭和 45 年頃、当時の市長が飛鳥田さんで、米軍より根岸競馬場を返還される事になりました。市長さんと第 6 地区の町内会長さんと役員の方々が一緒に、ゴルフ場で米軍の担当軍人さん同席のもと、

返還式が行われました。

それでも 1 年間は中に入れずにいました。2 年目ぐらいに入口の鉄の扉が開くようになりましたが、9 時にならないと開かないので入ることができず、朝の散歩は相変わらず間門に下りて不動坂を登ることが 2 年ぐらいありました。

昭和 48 年ぐらいになり、鉄の扉が取り払われて自由に入れるようになりました。当時も池がありましたが、流れ出る水は米軍住宅より流れ出る排水で、温かい水の小さな池でした。今の池の橋があるところくらいの大きさでした。そこから排水溝まで小川のようになっていました。毎朝歩きましたので元気になってきました。それから走るようになり、間門から本牧、そして山下公園まで行き、元町の裏通りから麦田のトンネルを走り、柏葉通りを戻って帰ってくる日々でした。

私の生まれ育った新潟県の寺泊にすぐ下の弟が住んでいたので「寺泊マラソン」が開催されるから参加しませんかと話が来て申込用紙を送っていただきました。大会参加がかなうと記念のトロフィーを頂けるはずでしたが、不整脈が見つかり、ペースメーカーを入れることになり、マラソン大会の出場は断念しました。

私どもの子供 2 人ですが、上の子が小学校 3 年生になった頃、中区

の市議会議員の杉本恒男さんが会長をなされていた「健民少年団」に、入団を求められ入りました。

学校でもピアニカを吹いていたので、鼓笛隊の部に入りました。町内大運動会の行進などで、健民鼓笛隊として、行進の折は、先頭を歩き、もっぱら、一丁目から山元小学校まで鼓笛を吹きました。

また、9月の横浜市主催の仮装行列にも健民少年団が行進していました。その先頭で鼓笛が吹奏して目立っていました。

それと、毎年3月の卒業式が終わった後、年度替わりの休み期間を利用して健民少年団が、長野や新潟のスキー場に行きました。一番思い出に残っているのが県境の赤倉温泉のスキー場です。

また、栃木県の沼田から入った片品スキー場は、最もよく行ったゲレンデでした。時には雪が無くなり、スキーの楽しみがなくて、皆さんゲレンデで泥んこ遊びをして、スキーウェアが手のつけられない状態になって困ったことが思い浮かびます。

子供2人ともスキーができるようになり、1人ずつにスキー用具などを買い求めて、中学・高校になっても冬になると各自友達とスキーに行っていました。

私も長男が入った「山手スキー愛好会」という地元のクラブに入りました。そのクラブは大和町にありまして、会員が60人ぐらいおり、田中世一さんという方が主催されておりました。その方は時計・メ

ガネ・印鑑店のオーナーで、横浜市内の印鑑組合の会長さんでもありました。夫婦共々スキーが大好きでした。

副会長さんは会長さんと小中の同級生で、大会の予約をしたり、各地区のスキー会などとの交流を取り持って下さり、私たち親子も参加して、各地区のスキー大会にエントリーしていました。

私は 72 歳の時に不整脈でペースメーカーを体内に入れる手術をするまで参加して行事に参加していました。

長男は、このクラブの会員の女性で、スキー場の民宿で夜の宴会をしているときにお付き合いができてしまって 2、3 年の後に結婚をしました。その仲立ちをされた方が副会長さんでした。それ以来の長い長いお付き合いをしております。

会長さんが、平成に入り、ガンで他界されまして、副会長さんが会長さんになりまして、現在もお元気で、スキー会長や地区の会長さんなどもしておられました。

最近、私も、ペースメーカーと小腸の手術などをしてからご無沙汰しております。-----

2013 年に奥様がパーキンソン病を患う。

2014 年に山川洋品店を閉店。

2015 年に町内会の役職を退任。

2016 年に相模原の特別養護老人ホームに奥様が入所。

2017年に町内会の役職に復帰。

⑦ 3/24 予備日 テーマのやり残しをおさえる。

山川さんの最後のお話しや意見交換など。

※希望者補講

満蒙開拓平和記念館訪問

<https://www.manmoukinenkan.com/>

南信州阿智村に平成 25 年 4 月オープン 国策として行われた満州移

民、満蒙開拓の歴史

● 資料画像や資料映像 ※現在も調査研究中

NHK スペシャル 日本人はなぜ戦争へと向かったのか 第3回「熱狂はこうして作られた」90分

<https://www.youtube.com/watch?v=Big-kF3QCLA>

<https://www.youtube.com/watch?v=df4CyZ2u0Lw>

NHK スペシャル 日本人はなぜ戦争へと向かったのか 第4回「開戦・リーダー達の迷走」50分

<https://www.youtube.com/watch?v=L-rTAqNIxu0>

NHK スペシャル 日本人はなぜ戦争へと向かったのか 「戦中編」100分

<https://www.youtube.com/watch?v=CTGhhjNeGEM&t=11s>